

高校生の友人関係のあり方と携帯メール依存性との関連

Relation between high school student's friendship and dependence on cellular phone e-mail

砂田 昭彦

Akihiko SUNADA

本研究では、現代の高校生の友人関係と携帯メールの依存性の関連を明らかにすることを目的とした。特に、近年盛んに取り上げられる自己防衛的友人関係が、爆発的な普及を見せる携帯メールへの依存に影響しているのではないかと仮説について、女子については仮説が支持され、自己防衛的友人関係が携帯メール依存に影響していることが明らかとなった。また、携帯メール依存には、パーソナリティとして、男女ともに公的自意識の関わりが明らかとなったことから、公的自意識と私的自意識のバランスに配慮することが重要であることが示唆された。

キーワード： 自己防衛的友人関係、携帯メール依存、私的自意識、公的自意識

問題と目的

高校生の携帯電話事情

「高校生の友人関係」に関する調査（全倫研全国調査委員会 1996.12月実施）の中で、「あなたは携帯電話を友人とのコミュニケーションに使いますか」との問い、「よく使う」8.9%、「たまに使う」10.8%、「ほとんど使わない」11.3%、「全く使わない」68.1%という結果が報告された。今から約10年前、高校生の間では、まだ携帯電話がほとんど浸透していないことを示している。

それに対し、本研究の事前調査では、高校生の携帯電話所持率は、88.6%（うち、メール使用率97.1%）を示している。（県立K高校1,2年生79名対象、2004.10月実施）

わずか10年間で高校生のコミュニケーションに関する環境は様変わりしている。

一方、携帯電話の利便性については誰もが認めるところであるが、とかく携帯電話はネガティブな話題で取り上げられることが多い。

特に若年層においては、出会い系サイトを利用した凶悪犯罪との関連がしばしば指摘される。2004年6月には、「ついに」といった感じで、警視庁が設置した「青少年問題調査研究会」による「青少年の意識・行動と携帯電話に関する調査研究」の概要が発表され、多くの関心呼んだ。それは、いくつかの項目内容において、一般少年と非行少年、携帯電話の所持者と非所持者、出会い系サイト利用者と非利用者などを対比した結果、概ね携帯電話が非行に関連する傾向にある、との報告である。携帯通話や携帯メールのシステムそのものが、それを使用する人間の心的側面や行動様式、とりわけ青少年の非行にどうつながっていくのかという科学的根拠が示されないまま、このような調査結果が世の中に伝えられていくことは、偏見や憶測に社会が歪められて

いく原因となりかねない。

このような多少曖昧さを感じる調査になってしまう背景に、携帯電話やメールにおける人間関係や青年の心理について、議論や実態報告がなされるようになってきたものの、未だその利用行動、意識、性格特性等の相互関連に関する研究が多くないことがあげられる。今後、この分野の研究が社会問題化した携帯電話のデメリット緩和への糸口となる可能性は大きいと考えられる。

青年期の友人関係について

栗原（1989）は、若者の友人関係について、アイデンティティ形成に関わるような親密な関わりがある一方で、「自他を傷つけ合わない、群れていることの安心感から成り立つ、元来は自己中心主義的な友人関係がある」とし、松井（1990）は、「最近の青少年の中には、友人との全人格的な融合をさせて、距離を保ち、一面的で部分的な関係にとどめようとする、疎隔的部分的な志向性が現れている」と述べている。また、岡田（1992）は、仲間に対して明るく接している青年たちが、一方で対人関係が親密になることを避けているように見えるとし、青年期における友人関係は全体として希薄化・表面化の方向に向かいつつあると述べている。

現代青年の友人関係に関するこれらの研究の共通点は、「自分が傷つかないようにする自己防衛的なつきあい方」であるといえる。具体的には、自分が非難されたり、相手との相違点が顕在化しないよう、自己を開示しないか、するにしても明るく楽しい自分を演技してありのままの自分をさらけ出さないことで、関係の親密化を避けているといえよう。また、相手の行動や相手との関係性に気配りをし、相手の気分を害さないようにする傾向も考えられる。

青年期の友人関係の構造とパーソナリティの関連について

自己防衛的友人関係が大きな特徴のひとつである

としたとき、対人関係における青年の心の目は、多くの場合、自己に向けられる傾向にあると考えられる。その場合、現代青年の友人関係に関わるパーソナリティとして、自意識に注目することができよう。

自分自身に意識が向きやすい傾向を示す自意識特性は、他者の目に映る自分自身に目が向きやすい傾向（公的自意識）と、自分自身の内面に注意の向きやすい傾向（私的自意識）に分けることができる（Feningstein, 1975）。

柏木（1983）は、他者から自分がどのように認識されるかを客観的に把握する側面である公的自己は、感情・好みなど直接的な内的体験の認識である私的自己よりも、自己把握が困難であるとしている。

また、他者把握においては、表出された観察可能な行動を認識することのほかに、直接には観察不可能な他者の内的過程を推測する過程があり、私的自己のほうがより困難であるとしている。

そして、「他者が自分をどう認識するか」についての把握は、自己把握であると同時に、他者の内的過程への推論でもあり、これは、他者の感情に対する共感性、他者の立場に立って物事を理解する能力（脱中心化）が前提となる。

このように、他者の視点取得を前提とする公的自己が形成されてのち、はじめて「理想自己」が形成され、現実自己との照応が可能となる（柏木,1983）。

そのことを岡田（2005）は、青年期までの自己の発達、同性同年代の友人関係との同一化に基づいた理想自己像の形成と、他者の視点から見た公的自己（現実自己像）を確立し、両者を照合した自己への評価感情（自尊心）を持つことができるようになる過程であるとしている。

また、青年期は、家族、学校、仲間集団を通して、自己概念を漸進的に進化させる時期と考えられている。エリクソンも、青年期をアイデンティティ確立の時期としている。梶田（1988）は、自己概念の構成要素について、自己の現状の認知と規定、自己への感情と評価、他者からみられている自己、

過去の自己についてのイメージ、自己の可能性と未来についてのイメージ、自己に関する当為と理想、という大別して6つのカテゴリーに分けられるとした。つまり、自尊心は自己概念の構成要素の

に該当するものである。また、自己概念の形成要因については、他者からの評価や承認による気づき、同一視に基づく取り入れ、役割遂行や様々な経験による気づきという3つが挙げられている。つまり、自己概念は、自己と他者とのコミュニケーションのあり方によって作り上げられるものであり、自己概念を構成する一側面としての自尊心も、その例外ではない。

したがって、青年期の友人関係により、自尊心が

形成されていくものと言い換えることができる。

以上のように、青年期において自己が発達する過程では、友人関係を経験するなかで自意識を確立し、それによる自尊心の獲得が重要な役割を担っていると考えられ、それら自意識、自尊心と携帯メール依存の関連を検討することで、友人関係の特徴により育まれたどのようなパーソナリティが携帯メール依存に関わるかを明らかにすることが目的である。

携帯電話と友人関係の構造との関連について

岡田（2000）は、若者たちにとって携帯電話は友人との関係を保つために必需品であるが、他人に煩わされたくないという志向も強いと述べている。

これらのことから、携帯電話は、親密性を高めるための道具ではあるが、一方で、若者たちは自分の領域にまで他人にあまり踏み込んでほしくないという矛盾した気持ちを常に持ち合わせていると考えられている。この矛盾した気持ちとは、先に、現代青年の友人関係で指摘した「自己防衛的友人関係」と同質のものと思われる。

自己本位とするコミュニケーションも可能なCMC（computer mediated communication）が「自己防衛的友人関係」と何らかの関連があるのではないかと推測がここに成り立つ。

このように、携帯電話、携帯メールの急激な普及の背景には、青年期の友人関係の構造的な特徴が何らかのかたちで関わっていると推測できるのではないだろうか。

本研究の目的

これまで、様々なメディア利用と友人関係との関連について検討することが求められ、研究が進められてきているが、現在のところ、現状報告的なものとなっているものが多い。今後は、友人関係の構造とメディアとの関連に加え、パーソナリティとの関連も含めて検討されることが求められると考えられる。

そこで本研究は、今日の高校生について、友人関係の構造、パーソナリティ、携帯メールの認知・依存性についてアンケート調査を行い、これら3要因の関連について分析を行い、高校生の友人関係の構造やパーソナリティが、携帯メールによるコミュニケーションにどう反映されているかの検討を行うことを目的とする。

< 研究1 > 携帯メール依存尺度の作成

問題と目的

研究1では、携帯メール依存尺度の作成を行う。現代社会における、爆発的な携帯電話の普及による生活への密着性や、携帯電話による凶暴な犯罪を

はじめ、生活スタイルの様々な変化にいたる多様な社会現象などから、携帯電話の依存性の程度に視点をおくことは、ごく自然なことと考えられる。

にもかかわらず、これまで携帯電話の依存性に関する実証的な研究はほとんどなされてきていない。そのため、先行する研究の中で、これに類する尺度を見いだすことはできなかった。

今後、携帯電話等に関する実証的研究を進める手がかりを作るためにも、携帯メール依存尺度の作成は意義のあることと思われる。

方法

質問紙の作成

(1) 尺度項目の選定

携帯メール依存尺度の作成にあたり、項目の採取と選定を行った。

項目採取の方法は、最近の社会問題を中心とするマスコミの情報、筆者自身の経験、臨床心理学専攻の大学院生ならびに大学生からのアドバイス等を総合し、携帯メールに関わる行動・感情反応について、筆者が9項目を選定した。

(2) 回答の選択肢

選択肢 1: あてはまらない、2: あまりあてはまらない、3: どちらともいえない、4: ややあてはまる、5: あてはまる の5件法とした。

調査の実施

(1) 調査日: 2005年 3月上旬

(2) 調査対象: 福岡県立M高校 1,2年生 234名(男子 119名、女子 115名)

(3) 調査方法: M高校職員に依頼し、HR時間を利用して調査を実施

結果と考察

尺度の一次元性の検討

携帯メール依存尺度の候補とされる9項目について主成分分析を行ったところ、第一成分として全ての項目が.59以上の高い負荷量を示し、尺度の一次元性が確認された(表1)。寄与率は、47.3%であった。

携帯メール使用頻度と携帯メール依存尺度得点の関係について

携帯メール依存性が高い場合、携帯メール使用頻度がある程度高くなる可能性があると考えられる。そこで、携帯メール依存尺度の候補とされる9項目からなる成分と、携帯メール使用頻度との相関を見ることで、携帯メール依存尺度としての妥当性を検討することとした。

前述のフェイスシートによる使用頻度の項目と、

携帯メール依存尺度の候補とされる成分との相関を検討した(表2)。

全体で見ると、1日の発信メール数、受信メール数、返信メール数、着信確認回数ともに弱いながらも有意な相関が認められた。

その中で、返信メール数の相関は、他の項目よりも高い相関で、やや相関があるものとして見てよいと言えるだろう。

返信メールは、発信メールや受信メールと異なり、相手のメールに反応してのことであり、心理的な動きをもっとも伴う行動と考えられることから、返信メールと携帯メール依存尺度候補成分との間に相関が認められたということは、この9項目からなる成分の、携帯メール依存尺度としての妥当性のある程度裏付けていると考えることができよう。

よって、本研究において、この9項目からなる成分を、今後、携帯メール依存尺度と呼ぶこととする。

表1 メール依存尺度の主成分分析

	成分
	1
1 しばらく携帯電話から離れていて、メールがなかったら寂しい	.72
2 メールをして相手から反応がなかったら孤独を感じる	.74
3 自分だけがアドレスを教えられないと仲間はずれになった気がする	.72
4 相手がすぐに返信しないとイライラする	.65
5 長時間メールが来ないと寂しい	.73
6 アドレス変更の知らせが自分だけだと存在感が低い気がする	.69
7 メールの中で電源が切れるとイライラする	.59
8 疑問形を終わったメールを送っても返事が返ってこない寂しい	.68
9 寂しい時に誰かにメールして、交信を断られたら嫌な気がする	.66

表2 携帯メール使用頻度と携帯メール依存尺度得点との相関

	携帯メール依存尺度得点		
	全体	男性	女性
1日の発信メール数	.166*	.011	.257**
1日の受信メール数	.273*	.260**	.273*
1日の返信メール数	.360**	.292**	.413**
1日の受信確認回数	.287**	.229*	.331**

** p<.01

* p<.05

<研究2> 尺度の検討

問題と目的

研究2では、高校生の友人関係、パーソナリティ、携帯メール依存の関連を考えていく際、先行研究で作成された尺度の再検討を行い、利用可能かどうかの確認を行う。

方法

以下の尺度項目を用いた質問紙調査を行った。

尺度項目

(1) 友人関係：落合・佐藤(1996)で作成された35項目。自分自身がどのような友人関係の取り方をするかについての質問項目からなる。

落合・佐藤(1996)の尺度を採用した理由は、自己防衛的友人関係を扱っている点で、本研究の目的に合致するためである。

落合・佐藤(1996)では、因子分析の結果、以下のような6因子が抽出、命名された。

友達に対して本音を出さず、自分のありのままの姿を見せないという防衛的な関わり方を表す「自己防衛的」

どの人とも同じように仲良くつきあっていたいという関わり方を表す「全方向的」

互いの考え方に違いがあっても迷ったり自身をなくすことなく友達とつきあっていくという関わり方を表す「自己自信」

たとえ傷つくことがあるとしても友達とは本当の姿を見せ合い、互いに分かり合おうとするつきあい方を表す「積極的相互理解」

まわりの友達と同じでいたいという関わり方を表す「同調」

友達みんなから愛され、好かれていたいという関わり方を表す「被愛願望」

本研究では、自己防衛的な友人関係に視点をおいていること、約10年前の因子構造と現在の分析結果との比較という2つの関心から、落合・佐藤(1996)と同様の35項目について再検討を行った。

「あてはまらない」(1)～「あてはまる」(5)間での5段階評定で、各項目について該当する段階1カ所に をつけるよう求めた。

(2) 自意識：Feningstein(1975)を菅原(1984)が邦訳した自意識尺度21項目。自意識尺度として、最も広く知られていることからこの尺度を採用することとした。(1)と同様の5段階評定とした。

(3) 自尊感情：Rosenberg(1965)に基づき、山本・松井・山城(1982)が邦訳した、個人の全体的な自尊感情の水準を測る尺度10項目。自尊感情尺度として、最も広く知られていることからこの尺度を採用することとした。(1)と同様、5段階評定とした。

調査の実施

研究1と同様である。

結果と考察

友人関係因子分析

友人関係に関する35項目について、主因子法、PROMAX回転による因子分析を行った。先行研

究に従い、因子数8から順次因子数を減らし、解釈が可能である因子をより多く採用するため、6因子解を最適解とした。いずれの因子にも.35以下と負荷量の低い項目を除外し、あらためて因子分析を行った(表3)。それぞれの因子内の項目もほぼ同様の結果となったため、因子の命名については、先行研究に倣った。

自意識尺度因子分析

自意識尺度については、すでにFeningstein(1975)らによって、自意識の強さに関する質問項目を収集し、因子分析を行った結果より、自己に向けられる意識には私的自意識と公的自意識の2つがあることが示されている。

公的自意識は、自分の外見や他者に対する行動など、外から見える自己の側面に注意を向ける程度の個人差を示すものであり、本研究で使用した菅原(1984)の21項目では、最初の11項目がそれに該当する。

私的自意識は、自分の内面、気分など、外からは見えない自己の側面に注意を向ける程度の個人差を示すもので、菅原(1984)の21項目では、後半の10項目がそれに該当する。

本研究においては、これらの尺度をそのまま使わず、より現状に適した尺度として扱うことを目的とし、入力されたデータにより、改めて因子分析を行った(表4)。

その結果、第1因子は、.40以上の高い負荷で9項目がまとまりを示した。これは、菅原(1984)において、私的自意識とされる10項目のうちの9項目である。

また、第2因子は、.40以上の高い負荷で10項目がまとまりを示した。これは、同様に、公的自意識とされる11項目のうちの10項目である。

そこで、第1因子、第2因子の双方に.40に満たない負荷しか示さなかった、「世間体など気にならない」「自分自身の内面のことは、あまり関心がない」の2項目を削除し、再度因子分析を行い、以後の分析においては、それらの項目をもって、因子得点を構成するものとする。

自尊心尺度主成分分析

自尊心尺度10項目(表5)について、主成分分析を行ったところ、「もっと自分自身を尊敬できるようにになりたい」という項目のみが、-.088と圧倒的に負荷が小さかったため、その1項目を除外して、再度主成分分析を行った。

その結果、「自分に対して肯定的である」が負荷量.463と若干低いものの、その他はすべて.500を超える高い負荷量を示したことから、以後の分析では、これら9項目をもって、自尊心尺度とすることとした。

表 3 友達とのつきあい方に関する29項目の因子パターン行列 (プロマックス回転後)

項目	因子					
	1	2	3	4	5	6
- 2.6. 傷つきたくないのに、友達には本当の自分は見せられない	0.78	0.11	0.11	0.11	0.14	-0.07
- 3.4. 友達と本音で話すのは避けている	0.72	0.03	0.01	0.09	0.09	-0.09
- 2.1. 友達とは本音で話さない方が無難だ	0.71	-0.13	-0.08	0.09	0.10	0.12
- 4. 友達にはありのままの自分は出せない	0.67	0.06	0.01	0.02	0.03	-0.07
- 5. 友達とは、互いに傷つくような話はしないようにしている	0.64	0.12	-0.13	0.06	0.02	0.03
- 1.4. 友達に自分のすべてをさらけ出すのは危険である	0.63	-0.09	0.01	0.03	-0.08	0.10
- 2.4. みんなとぶつかり合うのは避けている	0.58	-0.06	0.00	-0.18	-0.14	0.11
- 8. 友達には自分の考えていることを全部言う必要はない	0.54	-0.03	0.06	0.05	-0.22	0.06
- 3.0. 友達とは何でも本音で話し合うようにしている	-0.51	0.11	0.01	0.25	0.14	0.07
- 1.1. 少しぐらい傷つくことがあっても、ありのままの自分で接したい	-0.38	-0.03	0.14	0.19	-0.01	0.13
- 1.2. どんな友達とも協調し合いたい	-0.01	0.87	-0.05	0.04	-0.07	0.00
- 1.5. どんな友達とも楽しく付き合いたい	-0.02	0.86	0.03	-0.05	-0.02	0.06
- 2. どんな友達とも仲良くしたい	0.01	0.83	-0.01	-0.01	-0.08	0.02
- 2.7. どんな友達とも仲良くしようと思う	-0.02	0.81	0.08	-0.01	0.03	0.01
- 1.7. どんな人ともずっと友達でいたい	-0.02	0.73	0.01	-0.01	0.11	0.05
- 1.6. 友達と本音を言い合うことで傷ついても仕方ない	0.01	0.02	0.82	-0.11	0.04	-0.10
- 2.8. 友達と本当の姿を見せ合うことで、少しぐらい傷ついてもかまわない	-0.05	-0.04	0.81	0.08	-0.02	-0.04
- 6. 友達と分かり合おうとして傷ついても仕方ない	0.04	0.07	0.73	-0.04	-0.08	-0.01
- 2.9. 友達とは少しぐらい傷ついても、本当のことを言い合いたい	-0.09	-0.02	0.55	0.15	-0.02	0.18
- 3.2. 友達と意見が対立しても、自信をなくさないで話し合える	0.09	-0.10	0.06	0.83	0.07	0.06
- 2.2. 友達と本音でぶつかり合っても、自信をなくしてしまわない	0.08	0.03	0.01	0.65	0.03	-0.23
- 2.3. 友達と意見を交わし合っても、それほど怒わされない	-0.08	0.04	-0.07	0.59	-0.09	-0.20
- 3.3. みんなと意見が違ってても、できるだけ自分の意見を言うようにしている	-0.04	-0.06	-0.01	0.59	-0.08	0.28
- 3.1. みんなと違うことはしたくない	0.02	0.00	-0.04	0.13	0.81	-0.02
- 7. みんなと何でも同じでいたい	-0.20	0.01	-0.13	-0.04	0.76	0.02
- 1. 友達と意見や考えが食い違っても自信をなくしたりしない	0.04	0.16	-0.15	0.37	-0.46	-0.01
- 2.0. みんなと意見を合わせようと思う	0.27	0.07	0.11	-0.09	0.45	0.09
- 3.5. みんなに好かれていたい	0.04	0.11	-0.06	-0.03	0.04	0.87
- 1.8. みんなから愛されていたい	0.01	0.12	0.00	-0.14	0.00	0.84

因子間相関	1	2	3	4	5
2		-0.21			
3	-0.47		0.31		
4	-0.47	-0.01		0.40	
5	0.26	0.21	-0.12		-0.36
6	-0.29	0.54	0.45	0.09	

表 4 自意識 21項目 因子分析 主因子法 プロマックス回転

項目	因子	
	1	2
- 2- 9. 常に、自分自身を見つめる目を忘れないようにしている	0.82	-0.06
- 2- 8. しばしば、自分の心を理解しようとする	0.78	-0.04
- 2- 5. ふと、一歩離れたところから自分を眺めてみることもある	0.78	-0.10
- 2- 7. 他人を見るように自分を眺めてみることもある	0.75	0.00
- 2- 4. 自分が本当は何をしたいのか考えながら行動する	0.66	-0.18
- 2- 1. 自分がどんな人間か自覚しようと努めている	0.63	0.16
- 2- 6. 自分を反省してみることが多い	0.57	0.08
- 2- 2. その時々々の気持ちの動きを自分自身でつかんでいたい	0.54	0.17
- 2- 10. 気分が変わると自分自身でそれを敏感に感じ取る方だ	0.43	0.02
- 1- 1. 自分が他人にどう思われているのが気になる	-0.03	0.76
- 1- 9. 他人からの評価を考えながら行動する	-0.05	0.69
- 1- 8. 人前で何かする時、自分のしぐさや姿が気になる	0.03	0.68
- 1- 7. 自分についてのうわさを気にするほうだ	-0.07	0.64
- 1- 4. 自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる	-0.04	0.63
- 1- 3. 人に会う時、どんなふうになるまえばよいのが気になる	-0.04	0.62
- 1- 11. 人の目に映る自分の姿に心を配る	0.11	0.61
- 1- 10. 初対面の人に自分の印象を悪くしないように気づかう	-0.06	0.55
- 1- 6. 自分の容姿を気にするほうだ	0.06	0.49
- 1- 5. 人に見られるとついかっこうをつけてしまう	0.12	0.45
- 1- 2. 世間体など気にならない	0.03	-0.32
- 2- 3. 自分自身の内面のことは、あまり関心がない	-0.28	-0.31

表 5 自尊心 全体および性別の平均値 標準偏差

項目	全体		男子		女子		検定
	M	SD	M	SD	M	SD	
- 3- 1. 少なくとも人並みには、価値のある人間である	3.22	3.22	3.37	1.07	3.09	1.01	
- 3- 2. いるいるなよい素質をもっている	2.98	1.07	3.14	1.10	2.83	1.02	*
- 3- 3. 敗北者だと思ふことがよくある	2.86	1.25	3.02	1.26	2.71	1.22	
- 3- 4. 物事を人並みには、うまくやれる	3.09	1.04	3.27	1.03	2.93	1.03	*
- 3- 5. 自分には、自慢できることがあまりない	3.34	1.09	3.30	1.10	3.39	1.08	
- 3- 6. 自分に対して肯定的である	2.85	0.93	2.91	0.91	2.80	0.94	
- 3- 7. だいたいにおいて、自分に満足している	2.34	1.07	2.50	1.07	2.19	1.05	*
- 3- 8. もっと自分自身を尊敬できるようになりたい	3.65	1.12	3.53	1.20	3.75	1.02	
- 3- 9. 自分は全くだめな人間だと思ふことがある	3.33	1.29	3.29	1.31	3.38	1.29	
- 3- 10. 何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思ふ	2.96	1.20	2.88	1.19	3.03	1.20	

* p<.05
** p<.01

<研究3> 友人関係, パーソナリティ, 携帯メール依存の関連についての検討

問題と目的

研究3では, 研究1, 研究2により整理された因

子, 尺度を用いて, 友人関係, パーソナリティ, 携帯メール依存の関連を検討し, 友人関係諸因子が, 私的自意識, 公的自意識, 自尊心にどう関連し, またそれが携帯メール依存へと繋がっていくかどうかを明らかにすることを目的とする。

その際、モデルの基本的構造は、友人関係諸因子
パーソナリティ 携帯メール依存性 を
想定する。

その理由として2点を挙げる。

まずは、友人関係諸因子 パーソナリティについて示す。

児童期における生活の中心が「家庭」であるのに対し、青年期において青年は、「家庭」と徐々に距離を置き、「友人」にウェイトを置いていく(宮下、1995)。青年期は、生涯にわたる心の友を得られる時期であり、友人との交流のなかで、精神的安定が得られ、人間関係を学び成長していく(碓井、2000)。このように、青年期における友人関係は、重要な意味をもち、青年期において欠かすことのできないものである。友人関係を経験するなかで、個人それぞれの特性が確立されていくものと捉えたことによる。

つぎに、パーソナリティ 携帯メール依存性についてである。

携帯メール依存に関する検討に未だ蓄積が豊富でない現状において、まずは、どのようなパーソナリティが携帯メール依存に陥る傾向にあるかという把握が必要ではないかと考えるからである。

特に、近年、高校生の青年期における友人関係の特徴としてしばしば指摘される自己防衛的友人関係が、携帯メール依存に影響している可能性があるのではないかという仮説にたち、高校生が友人関係を通じて自己をどのようにとらえ、それによって携帯メール依存が規定されていくかどうかということを探的に検討する。

方法

被験者・・・研究1, 2と同様

質問紙の構成・・・研究1, 2と同様

結果と考察

友人関係、パーソナリティ、携帯メール依存の関係を明らかにするため、すでに検討してきた尺度、因子の相関をふまえて、パス解析におけるモデル構成のための重回帰分析を行った。私的自意識、公的自意識、自尊心の3つのパーソナリティ尺度、および携帯メール依存尺度を合わせた4つの変数を従属変数とし、ステップワイズ法を採用した。

その際、説明変数は、友人関係諸因子に加え、3つのパーソナリティ尺度については、従属変数の対象となっていない場合、説明変数として投入することで、パーソナリティ間の関連にも注目した。

さらに、性差の確認をするため、モデルについて

は、全体、男子、女子の3つのパターンを設定した。

図1 重回帰によるパスダイアグラム(男子)

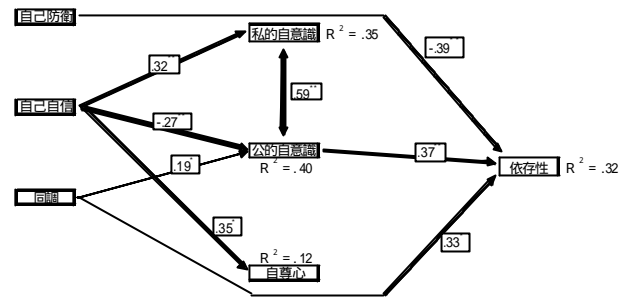


図2 重回帰分析によるパスダイアグラム(女子)

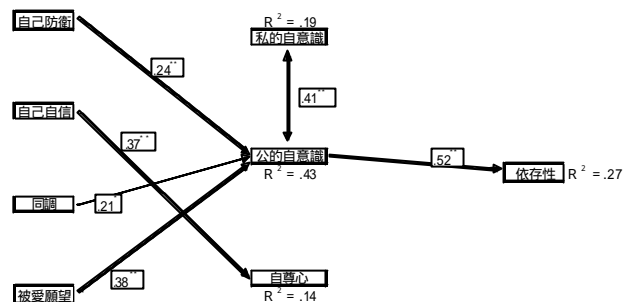
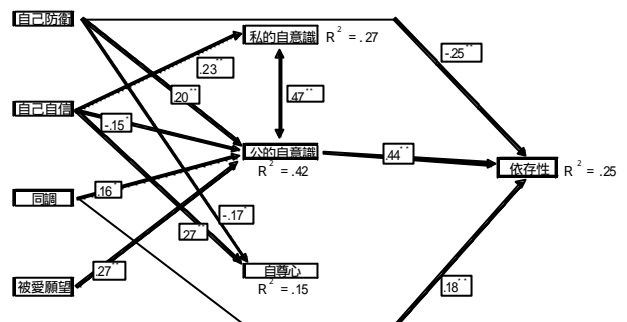


図3 重回帰分析によるパスダイアグラム(全体)



総合考察

自己防衛的友人関係と携帯メール依存性の関係

男子では、自己防衛的友人関係が高まると、携帯メール依存性が低下することが示された。自分が傷つくのをおそれ、本音を出さずに友人関係を持つとする傾向が高いほど、携帯メール依存性が低下する傾向といえる。

女子では、自己防衛的友人関係の高まりが公的自意識を促し、それに伴い携帯メール依存性が高まっていくことを示しており、間接的ではあるが、自己を護ろうとする傾向が高くなるほど、携帯メール依存性が高くなる傾向と理解できる。これは、仮説を支持しているものといえる。

この傾向は、第2研究で友人関係の因子分析をした際、各項目を男女別に比較して得られた結果、さらには、落合・佐藤(1996)や長沼・落合(1998)

の友人とのつきあい方における性差の研究結果に合致する。

それによると、一般的な友人関係において、男子は女子よりも相手の領域にあまり踏み込まない自立したつきあい方を持つようとする傾向にあり、女子は男子よりも相手に本音を表し、より積極的に接していく傾向にあると示されている。

以上より、一般的な高校生の友人関係の特徴が、携帯メールでのコミュニケーションに同じ形で現れているといえる。

私的自意識と公的自意識の相互作用への期待

このように、公的自意識 CMC という図式に視点を当てて考えると、これを制御するものとして私的自意識に注目することでの効果が期待できるのではないかと考える。

私的自意識により私的自覚状態を生じさせる要因として、内省、日記を書く、白昼夢、瞑想、小さな鏡に向かうこと、等が挙げられている。改めて考えると、現代社会において、また、特に高校生などにおいては、このように私的自意識を働かせるようなゆったりとした時間や空間に恵まれていないことに気づかされる。エリクソンによる「同一性拡散」の危機はこのようなところにも潜んでいるのではないだろうか。なおさら、私的自意識への期待はふくれあがってくる。

情報化、スピード化の時代にあり、他者の目にさらされる機会の多い現代社会において、ゆったりとした時間の中で、私的自意識を中心とした自己の振り返りの時間が必要とされる。公的自意識と私的自意識のほどよいバランスが、複雑化する社会に適応しつつも、情報化、スピード化に翻弄されず、主体的に生きていくことを可能にすると考えられる。

高校生の携帯メール依存への指導について

男子は、自己自信から公的自意識に向かって、負のパスが最も強い関係性を示している。

これは、友人関係のとり方に自信が持てなくなると公的自意識の上昇に伴い、携帯メール依存性が高くなることを示している。

自信を獲得するためには、物事に対する達成感を積み上げることが必要である。学校生活において、生徒が関わる役割や活動は数限りない。クラスにおける日直、係活動、掃除当番、集団が大きくなると委員会活動、部活動、生徒会活動、学校行事としての体育祭、文化祭などがあり、取り組み次第で達成感を得ることのできる機会はどこにでも転がっている。自信に乏しいと思われる生徒にとっては、より身近なところから取り組むことが必要である。

そして、取り組みによる達成感を得るためには、肯定的評価が求められ、そこから生徒は参加できている存在感、貢献できている達成感を感じるである

う。肯定的評価こそ教育者としての私たちが負うべき課題といえる。日常的な清掃活動でさえ、よい評価を受けると生徒は喜び、つぎへのステップへと進むに違いない。

女子は、相対的に関わりの強いものとして、自己防衛、被愛願望から公的自意識へパスが示された。どちらも正のパスであることから、自分が傷つきたくない、誰からも愛されたいという傾向の高まりが、公的自意識を通じて携帯メール依存を高める結果となった。この2つの特徴を合わせて考えると、女子の携帯メール依存の高まりの背景として、他人よりも自分の傷つき具合が気になり、愛するより愛されたいというような自己中心的な友人関係のとり方が関連する傾向があると考えられる。

友人関係の基準が自分自身にあり、相手の立場や、相互の関係にあまり意識がない傾向と受けとめられる。

このような女子の性質の改善に対し必要なことは、それまで接点のない他者との出会いの中に関わりを作っていくことである。そのためにもっとも手軽なのが、クラスにおける席替えである。席替えは、クラスの雰囲気のリフレッシュするのに効果があり、また新たな人間関係の始まりとしてのきっかけにもなる。そして、席替えをした際、席替えにより、新たなメンバーによる行動や活動が必然的に行われるような工夫も加わると、不特定な他者とのコミュニケーションに効果的であると言えよう。一般に、席替えのように身近な動きは、クラスでのイベント的な行事として捉える傾向にあるが、人間関係作りの観点においては、非常に意義の高いものである。このようにさりげない取り組みであろうとも、その意義を深く認識し、目的を持って行うことができれば、成果は大きいと思われる。

また、挨拶の指導を日常的に行うことも、他者との関わりの上で効果的であろう。挨拶が苦手ということの裏に、多くは、たとえ自分から発しても相手の反応が充分でなかった場合への、ある意味先行した怖れのような感情が存在すると思われる。挨拶を習慣づけることで、能動的に他者と関わることができるようになり、見ず知らずの人とも積極的に関わりが持てることが、相手を思いやる心につながっていくことは、筆者のこれまでの経験により、確信を持っているところである。

そのためには、できない者に訴えても自らできるはずもなく、まずは、指導者自らが、挨拶の手本を示すことである。その繰り返しによる影響がポジティブなものとして現れるのを待つしかない。そして、その後、生徒が自発的に挨拶をすることができた場面を逃さず、挨拶で返すことができたとき、生徒は初めてその意義を学ぶことができると言えよう。

指導者自身が対生徒に限らず他者に対し気持ちのよい挨拶ができていない光景があるとするならば、それは、生徒の成長過程においてネガティブな要因になっているのではないだろうか。

以上、高校生の携帯メール依存に対し、本研究の結果をもとに考えられる指導について検討したが、端的に現象面だけで考えた場合、携帯メール依存が問題となるならば、学校生活における何らかの規制等により、携帯電話使用に制限を加えることも考えられよう。

しかし、どのような現象であれ、そこには社会的な背景があり、目に見える姿はその反映であると捉え、原因となっている背景そのものに思いを巡らせていくことが肝心である。

特に、本研究では、携帯メール依存という大きなテーマが、実は公的自意識というパーソナリティに関わっていることが明らかとなった。公的自意識の性質を考えたとき、それは、携帯メール依存のみならず、他の多くの課題に関係することが考えられる。したがって、青年期の多くの課題の背景は、青年の成長を促す些細な日常の中にあると捉え、青年と私たち大人の関わりの問題と認識するべきであろう。

高校生といわず、社会全体が、公的自意識中心になりがちなあわただしい状況にあるからこそ、日常生活そのものを見直すことから始め、「自分探し」のできるゆったりとした機会を設けることで、様々な課題が好転していくものと考えられよう。

今後の課題

今後の課題として、まずは対象者の規模を拡大させることが挙げられる。

本研究は、対象が県立高校1校の生徒に限られた研究である。学校種別、地域別、学年別、異性とのコミュニケーションといった観点からも研究を広げていくことができるものと考えられる。

つぎに、独自に作成した携帯メール依存尺度について、さらなる妥当性の検討が必要であろう。項目の内容を再考していく中で、今回設定した依存性に該当しなかった対象者も新たに依存性に属する対象とされる可能性も考えられる。

また、本研究においては、自尊心と携帯メール依存には何ら関連を示すことがなかった。

自尊心は、その程度が精神的健康度を示すものとしてポピュラーな尺度である。一方、携帯メール依存は、その内容からも、ストレスや精神的不安定を伴うものとして考えられるため、両者には何らかの関連があるものと予想していたが、それに反する結果となった。今後は、他のどのような精神的健康度との関わりがあるかの検討をしていかななくてはならない。

最後に、今回は自意識に注目したが、他者意識、孤独感などは、携帯メール依存に深く関わっている可能性があるのではないだろうか。そして、高校生の友人関係にとどまらず、様々な対人関係へと広がりを持つことが、携帯メール依存をより明らかにするために期待される場所である。

引用文献

- 全国高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会
全国調査報告書 1996.12 実施
- 岡田努 1992 現代青年の友人関係に関する一考察
日本心理学会第56回大会発表論文集 159
- 岡田努 2005 現代青年の友人関係・ライフイベントと自己の発達に関する研究 金沢大学文学部論集行動科学・哲学編 25 15-32
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友人とのつきあい方の発達的变化教育心理学研究 44 55-65
- 長沼恭子・落合良行 1998 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究 10 35-47
- 警視庁設置「青少年問題調査研究会」2004.6 報告
「青少年の意識・行動と携帯電話に関する調査研究」概要
- 松井豊 1990 友人関係の機能 斎藤耕二・菊池章夫編著 社会化の心理学ハンドブック 川島書店 283-296
- 岡田朋之 2000 移動体電話利用におけるメディア特性と対人関係 - 大学生を対象とした調査事例より - 情報通信学会年報 11 43 - 60
- 碓井真史 2000 人間関係の心理 岡村一成・浮谷秀一(編著) 青年心理学トゥデイ 115 - 130 福村出版
- 宮下一博 1995 青年期の同世代関係 落合良行・楠見孝(編)講座 生涯発達心理学 第4巻 自己への問い直し - 青年期 155 - 184 金子書房

参考文献

- 船津衛・安藤清志 2002 自我・自己の社会心理学 北樹出版
- 堀洋道監修・山本眞理子編 2001 心理測定尺度集 サイエンス社
- 梶田叡一 1988 自己意識の心理学 第2版 東京大学出版会
- 栗原彬 1989 やさしさの存在証明 - 若者と制度のインターフェイス - 新曜社
- 柏木恵子 1983 子どもの「自己」の発達 東京大学出版会